

# 光る再び方

2023年は映画監督・鈴木清順(1923~2017年)生誕100年に当たる。大胆なカットや斬新な色彩表現は「清順美学」と呼ばれ、世界的評価を得た。ひょうひょうとした生き方も作品とともに多くの人に愛されてきた鈴木清順は、旧制弘前高校(現弘前大学)の卒業生でもある。同校に関するビデオ映画を手掛けたほか、晩年にも映画のロケで弘前市を訪れた。22年は4Kデジタルで復元された「殺しの烙印」がベネチア国際映画祭で最優秀復元映画賞に輝き、23年は節目を記念した特集が東京都内の劇場で開催される予定で、国内外で「清順映画」に対するさらなる盛り上がりが見込まれる。

## 鈴木清順監督 生誕100年

### ビデオ作品「弘高青春物語」

鈴木清順は旧制弘前高校(現弘前大学)の出身で、卒業から約40年の時を経て、同窓会の依頼でビデオ作品「弘高青春物語」(1993年)の監督を務めた。同窓会関係者に配られたほか、定期的な販売もされたが、劇場での上映機会は少なかったとされ、「幻の映画」とも呼ばれている。立教大学文学部准教授で、2022年に同作に関する論文を発表した尾崎名津子さん(41)は「弘前での暮らしが清順の監督人生にも影響を与えており、特別な思いでビデオ映画を手掛けていたと思う」と語る。

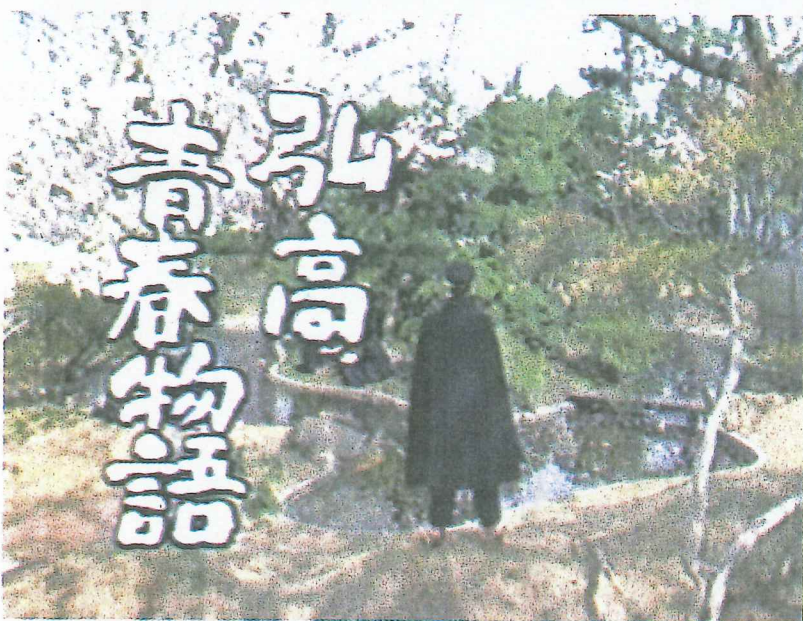
清順は東京・日本橋の生まれ。1943年、同校に入学し、学徒出陣によりフィリピンや台湾を転戦した期間を除き、卒業の48年までを同校で過ごした。「弘高青春物語」は卒業生たちの思い出を元に作られており、当時の地元劇団や地域住民、陸奥新報社などが協力。撮影期間は約1年で、さくらまつりやねぶたといった津軽の風景を収めている。在学時のことは鈴木監督のエッセーに「弊衣破帽、壺



弘前大学附属図書館に保管されている「弘高青春物語」のビデオテープ

## 「幻の映画」に特別な思い

カウは高校生のシンボル、私もそうした。手拭いを腰に長く垂らしてね。(中略)青春の覇気を感じたんだろうな」などと記されており、映画にも同校の学生を連想させる人たちが登場する。当時流行した言葉や在学中に戦争で命を落とした学生を悼む場面、写真資料も映像に収めていることに、尾崎さんは「卒業生の証言だけでなく、在学中に出征した清順自身の思い出も盛り込まれているだろうし、大学に残されていた資料にも目を通していたと思われる」と話す。同作の撮影を行った92、93年はテレビドラマの仕事などで多忙な時期だったとされる。そんな中、「シナリオの作成から予算の編成(前代未聞の低廉な製作費)、更に直接メガホンをとった監督まで」「旧官立弘前高等学校同窓会報」(第16号)を担当した上、報酬は「ゼロに近い」「ものだったという」に



## 旧制弘高 在学中の経験生かす

もかわらず、テレビドラマで共に仕事をした制作スタッフやプロデューサーを引き連れたほか、俳優の野川由美子さんらも出演した。尾崎さんは「清順にたっぷりの桜は弘前の桜を見てスタッフを総動員している。とた」もせいで、やっつけ仕事ではない。そういった点からも商業映画とは別物で、かなりの熱量で取り組んだことがうかがえる」と推察する。旧制高校時代の経験は別の作品にも生かされている。代表作の「けんかえれじい」(66年)には、鈴木監督が高校時代に知った戦前の思想家・北一輝が登場するほか、咲き誇る桜も収められている。学生時代から鈴木監督



「清順の映画は豪華絢爛(けんらん)なところが魅力の一つ」などと語る尾崎さん。過去の弘前大学の准教授を務め、今も非常勤講師として関わっている尾崎さんは「けんかえれじい」は原作があるが、



「弘高青春物語」の一場面(弘前大学附属図書館提供)

※この記事は陸奥新報社の提供です。

【問合せ先】弘前大学附属図書館 jm3152@hirosaki-u.ac.jp

この画像は、当該ページに限って陸奥新報の記事利用を許諾したものです。転載ならびにこのページへのリンクは固くお断りします。